

事例 1

アスペルガー症候群・自閉性障害の特性と基本的な対応

※現在は自閉スペクトラム症とされています。

アスペルガー症候群(以下自閉性障害を含む)の子は、他人の気持ちや社会の習慣に合わせることが苦手で、自分の世界に合わせて行動してしまう特性があります。彼らにどのように対応すればいいのでしょうか。

場面



A君は、4年生でアスペルガー症候群の診断を受けています。よく教師を試すような言動をとります。授業中にもかかわらず、立ちあがってふざけた行動をしたり、暴言をはいたりします。

対応を考える

A君が大人を試すような言動をしたとき、どのように対応すればよいのでしょうか。下に書きましょう。

NG対応

真正面から対峙する

アスペルガー症候群の子の特性で、相手を支配したいという気持ちが強いです。

仮に、ふざけた行動に対して、「A君やめなさい。なんでそんなことやったの？」と真正面から対峙したとします。すると、A君は教師に上に立たれたと思い、反抗してくることが多いでしょう。『はあ！？何であんたにそんなこと言われたいといけないの？』『うぜえし』と暴言をはくことも予想されます。そうなると、教師もむきになりがちです。売り言葉に買い言葉になると指導を入れることができません。事態が悪化することが予想されます。

■解説

【対応1】 大人を試すような言動にも冷静に対処する

アスペルガー症候群の子どもは、大人を試すような言動をする場合がある。授業中、暴言をはいたり、立ち上がってふざけた行動をしたりなどである。このような時、教師も頭に血が上り、正面から対峙してしまいがちになる。

しかし、子どもと一緒にレベルで対決してはいけない。

ポイントは以下である。

言動は、その子の脳がさせていると考える。

暴言は無視する。ただし、他の子どもに、教師が許していないことを示すためにも、にらみつける程度の対応は必要なこともある。とにかくこのような時、過剰に取り合わない方が良い。

【対応2】 子どもを癒す5つのスキルを使う

臨床発達心理学者の平山諭氏は、発達障がいの子どもの対応として、次の5つのスキルを使うことを提唱している。

1 「見つめる」 2 「ほほえむ」 3 「はなしかける」
4 「ふれる」 5 「ほめる」

落ち着いている時、穏やかな時に、前述の「見つめる」「ほほえむ」「はなしかける」「ふれる」「ほめる」の対応をし続けることこそが大切である。

こうした対応で、アスペルガー症候群の子ども達の脳を癒して(不安を除去して)いく。

【対応3】 指示やルールに数字を入れ見通しをもたせる

例えば、アスペルガーや自閉性障害の子に、教師が席をはずし、しばらく待ってほしい時、「ちょっと待っててね」と言ったとする。しかし、決してこのような言葉をかけてはいけない。

「5分もあれば戻れる。いいだろう」

そんな思いで、先のように声をかけ、職員室に忘れ物を取りに行く。教室に戻ってみると、パニック症状を呈し、渡していたプリントをすべて破っていた。

私自身の苦い思い出であり、大いに反省した。

このような時は、「5分待ってて。プリントを半分やっておこう」と数字をはっきりさせ見通しをもたせると良い。

アスペルガーの子どもの状態は次のような例に近い。

自分が初めての海外旅行で、右も左も分からない土地に着いた。頼りの添乗員が「ちょっと待っててね」と言って離れた後、帰ってこない。

きっと不安で不安でしょうがないだろう。このような時、「30分だけ待ってて下さい」と言われれば、安心して待つことができる。指示やルールに数字を入れて見通しをもたせていく。

大恵信昭 『特別支援コーディネーターに必要な基本スキル小事典』(明治図書)

アスペルガー症候群の子に効果のあった指導

1 その子の苦痛を理解する

アスペルガー症候群の子は自閉症の特徴を有している。しかし、知的な遅れも少なく、言語的にもあまり遅れを感じられない。そのため、通常の学級で指導を受けることになる。そこで絶対的に必要なことは、

その子に対する理解

である。特に教師が理解していなければ、その子はずらい毎日となる。例えば、

大きな空間・大勢・大きな音

については苦痛とする子が多い。「体育館で行う体育、集会」などがそうである。そして、それは脳の器質的な問題であり、慣れればできるという問題ではない。黒板につめを立ててキキーと音を立てられるとたまらない、と同じである。

にもかかわらず、無理にその場に押し込め、ひたすら騒いでも出さない、としたら、それは苦痛以外の何物でもない。

2 「ほかの子と同じようにしなければならない」という教師のこだわりを捨てる

何とかみんなと一緒に活動させなければならない。その思い、教師の責任感が強ければ強いほど、その子に頑張らせてしまう。しかし、一緒に活動できなくてもよいのである。どうしてもつらい場面は、

相談学級、もしくは補助員、管理職等と過ごせる体制

を作る。その中で無理せず誘い、体育館までみんなの列に入って歩いて入ったらそれで十分と考える。そして大いにほめる。「最初から無理に入らせないと、この先ずっと入れなくなってしまう」と考えがちである。しかし、障害のある子は逆である。最初はその子の苦痛は避け、徐々にできるようにしていく、ということ！それが遠いようで近道となる。

味覚異常など、感覚が通常と明らかに違う場合もある。給食をほとんど食べない。しかし、ふりかけをかければご飯は食べる。であるなら、ふりかけをかけて食べればまずよしとする。そして、学年が変わるときなど大きな節目、変化のときに、学校では少しずつ減らす、なくすということで食べられるようになった例も多い。

「ほかの子と同じようにしなければならない」という教師のこだわりを、まず、捨てることが必要である。

3 効果のあったエピソード

通常の学級にとにかく入らせる、できるだけ、どの教科も参加する、ということを強いられたアスペルガー症候群の子がいた。

知的に少し遅れがあり、算数、国語は相談学級に通級していた。相談学級ではいきいきとしている。しかし、通常の学級に入ると、音楽では耳をふさぎ、体育では用具室に入ってしまう。

それでも一緒にさせていると、まわりの子をたたいたり、ついてくれていた補助員の教師を蹴ったりし始めた。

本人も、まわりの教師もくたくたとなった。そこで、

相談学級でもよし、帰りも早めに教室を出て、好きな遊具をやりながら迎えを待つようにした。

また、会話はできるように見えるが、かみ合わないところがあり、コミュニケーションの未発達が見られる。そこで

相談学級に来る、ほかの学年の子と会話することからはじめた。

あいさつが徐々に自分からもできるようになり、その力がついてくると同時に、通常の学級にも嫌がらず入れる機会が増えた。

怒りだす場面も少なくなった。「今させなければ大変なことになる」この思いを捨て、その子の苦痛を取り除き、その子ができる、その子をほめられる場面をつくり出すことがその子の将来へとつながっていく。

河村要和『担任ビギナーズ・365日の仕事術3 小学3年の担任になったら 学級づくり・授業づくり』
(明治図書)

コラム

PDDの特徴

PDD(広汎性発達障がい)についてです。広汎性ですから、脳の広い範囲で悪影響を及ぼしています。アスペルガー症候群や自閉性障害などが入ってきます。PDDの特徴も3つあります。

①「こだわり」です。「同一性保持」と言います。

偏食もそうです。自閉傾向の子が白いご飯しか食べないというのは、つまり新しいことに不安がある。あるいは、教室が変わったり、旅行に行ったり、山の学習に行ったりするのに不安がある。なかなか慣れることができない。いつも同じ状態でないと不安なのです。

②「孤立」です。孤立しやすい、集団から出て行きやすいということです。

ただ、孤立というのはいけないうことばかりじゃなくて、生きていく上で必要なことも多いし、1人でいたって何ともない人もいます。

「友だちがいなくてダメなんじゃないか」という心配も必要ないのかも知れません。

③「コミュニケーション」が取りにくいということです。

アスペルガー症候群の人にはコミュニケーション障害がないと言われていますが、独特の喋り方があったり、質問攻めのようにしつこさがあったりします。

『第2回 発達障害対応力向上セミナー 記録冊子』(NPO法人岡山教師力向上支援サークル)

事例 3

強いこだわりがあるとき

高機能自閉症の特徴の中に、「こだわり」があります。やり始めたことは途中で終わることができないなどです。彼らにどのように対応すればよいでしょうか。

場面



D君は、高機能自閉症の4年生です。漢字指導や計算練習など、D君がいったんここまでやると決めたことはなかなかやめることができません。

直接本人の前に行きスキンシップをしながら次の指示をしても、やりたい活動にこだわり、気持ちを切りかえることが難しいです。

対応を考える

こだわりの強いD君に、どのように対応すればよいでしょうか。下に書きましょう。

NG対応

無理にやめさせる

D君からしてみれば、「まだできていないのにどうして途中でやめないといけないの?」と思っているにちがいありません。

それを無理矢理にやめさせるのですから、パニックになっても仕方ありません。教師の都合で無理矢理にやめさせるのではなく、D君のこだわりをうまくコントロールしていくことが必要になってきます。

■ 解説

【対応】 どこまでするのかを最初に伝えておく

例えば、漢字練習でしたら、今日練習する漢字に赤鉛筆で印を付けます。
また、計算練習でしたら、カードにページ数や問題番号を書いておいたりします。

D君が取り掛かる前に伝えておくことで、見通しを持って取り組むことができるのです。

気をつけないといけないのが早く終わったときになにをするかということです。
何をしたらいいのか分からない状態はD君を不安にさせます。
早く終わったときには、好きな絵を描いたり、好きな本を読んだりするといった指示も必要です。

最初から最後までやることがはっきりと決まっていればD君の心が安定するのです。

参考文献: 矢嶋秀行「教室の障害児」創刊号 (明治図書)

教室での エピソード

行動を教え、こだわりに対処する

D君が掃除時間になっても掃除をしようとしなない。

一緒にほうきをもって掃いたり、ぞうきんを持って絞ったりしたが全くやろうとしない。

ある日、D君が掃除場所をふらついているときに上級生とぶつかり、暴言を吐いた。「これは放っておけない」と思い「謝りなさい」と指導するが、謝るところかD君は逃げようとした。

別室に連れて行き、「あなたの言ったことは許されることではありません。謝る勇気が出てくるまでこの部屋にいてもらいます」とすごんでみたものの反省している様子は全く見られない。

床に寝そべったり机の下に隠れたり、こちらの指導が全く入っていかないのである。「やめなさい」と言うとやめるのだが、しばらくたつとまた床に寝そべり始めた。しばらく同じようなやりとりが続いた。

D君を指導している間に、「これはこのままではいけない」と感じてきた。何か別の指導の方法を考えざるを得なかった。

そこで、D君の手を取り、暴言を吐いた相手の元へ向かった。私はD君と一緒に謝ることにしたのだ。

「謝るときはね、こうやって頭を下げるんだよ。ごめんなさいって言ってね」私がごめんなさいと言いながら、頭を下げて見せた。

次に、D君の頭を手で押して下げさせた。そして、私が「ごめんなさい」と言った。

これで形だけでも謝ったような形となった。

暴言を吐かれた上級生は、渋々ながら納得したようであった。

参考文献: 間嶋祐樹「特別支援教育教え方教室」19号 (明治図書)

勝ちへのこだわり・対人関係を鍛える 「ペーパーチャレラン」

1 アスペルガー傾向の子どもが熱中するペーパーチャレラン

学校で、アスペルガー傾向の子どもを担当する上で特に困難となるのは、

1. 対人関係の困難さ
2. 勝ちへのこだわり

であろう。

アスペルガー症候群は、「対人関係」を築くことを困難としている。集団行動が取れない、友だちとうまくかかわれない。このような困難を抱えるアスペルガー傾向の子どもであっても、「ペーパーチャレラン」は熱中して取り組む。

ペーパーチャレランは、やるべきことが「明確」な上に、アスペルガー傾向の子どもが得意とする「単純作業の繰り返し」が多い。

これだけでもアスペルガー傾向の子どもが熱中することがわかる。

2 「順位づけ」で「対人関係」の訓練をする

さらに「対人関係」に絞れば、「順位づけ」が最高の「対人関係」の訓練となる。

後ろの黒板で順位の変動時、順位を入れ替えた子どもは、順位から漏れてしまった子どもの紙を本人に返しに行かなければならない。

クラスにいたA君は、最初どのように返しに行けばよいかかわからずに混乱していた。

私が言葉から動作まで教えてプリントの返し方を1つひとつ教えた。

このことで、A君は1つのコミュニケーションスキルを身につけたことになる。

さらに他の子どもと混じって、「1位のB君の答えを確かめよう！」という場面も多く生まれた。

3 「負け」の耐性をつける

次に「勝ちへのこだわり」である。

アスペルガー傾向の子どもは「勝ち」に固執することが多い。「負け」を認められないのだ。

しかし、五色百人一首の取り組みでもわかるように、「何十回」と「負け」の経験をすることで「負け」への耐性がついてくる。

ペーパーチャレラン表紙

ペーパーチャレランは、算数の分野での五色百人一首という使い方もできる。

五色百人一首でも「負け」の大量経験を積み、算数でも「負け」の大量経験を積むことができる。

さらに五色百人一首との組み合わせで、「どちらかで活躍できる」というアドバンテージも登場する。

このように、「勝ちへのこだわり」を超えさせていく上

で重要なことがある。

それは、

1. 継続的に
2. 何十回と
3. やり続ける

ことである。

このことから発達障がいの子どもの多くのことを学んでいく。

実際に「勝ちにこだわり」のあったCさん。五色百人一首で負けることが耐えられなかった。しかし、**ペーパーチャレランでは得意分野ということもあり、2位になっても必ず1位に返り咲くために必死で挑戦し続けた。**

ペーパーチャレラン原稿

このことが五色百人一首の場でも応用されたのか、「勝ちへのこだわり」を徐々になくしていった。

幾重にも張った「伏線」がつながっていく瞬間であった。

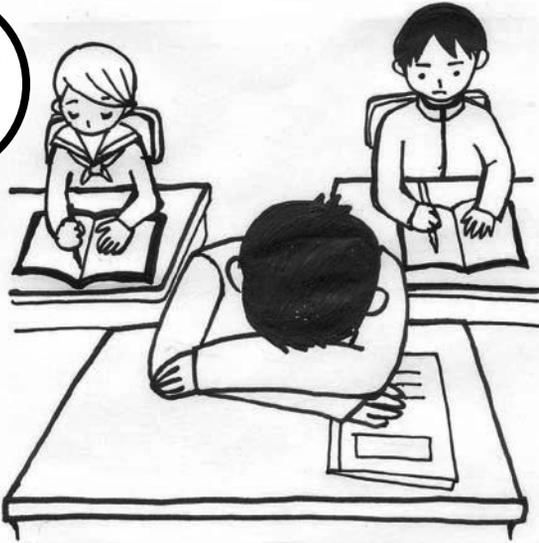
小嶋悠紀「向山型算数教え方教室」2010年5月号（明治図書）

事例 9

ファンタジーに入ったとき

授業中、机に突っ伏して、ファンタジー(自分の世界)に入る子がいます。彼らにどのように対応すればいいのでしょうか。

場面



中学生のC君は、国語、数学などの時間、よく机に突っ伏しています。

パソコンでの学習活動が終わり、プリントやスキル類での机上学習が始まったときに多いです。

対応を考える

C君が机に突っ伏してファンタジーに入ったとき、どのように対応すればいいのでしょうか。下に書きましょう。

コラム

ファンタジーは脳を癒している

平山諭先生から学んだことである。

普通学級から特別支援学校に転入してきたC君は、情緒的なこじれも、かなり引き起こされている。

C君には、このような時間(ファンタジー時)も必要なのではないかと考えている。

大恵信昭『特別支援を要する子のコミュニケーションスキルを高める指導法』(明治図書)

■解説

【対応】 そのまま、そっとしておく

もちろん学力はつけていきたい。

以前は、ファンタジーの時にそばに行き、机の上をトントンと軽く叩く、背中をさするなど、ファンタジーから覚まそうとする行為をおこなっていた。

このようにすると、「どうした」「ちょっと待て」などと、興奮した状態で我に返ったようになり、その結果、C君のところに釘づけになる。C君が学習活動に戻るまでに、多大な時間がかかる。

同時に授業している他の子どもに、全く対応できない状態にしばしば陥った。

現在のファンタジー時の、意図的な無視の対応はどうか。

しばらくすると、ファンタジーから戻る。

この時、「うつしまるくん」などのTOSS教材であると、説明もいらず、すぐに取りかかることができる。

結果的に、以前の対応より、学習活動に早く取り組めている。

大恵信昭『特別支援を要する子のコミュニケーションスキルを高める指導法』（明治図書）

コラム

ファンタジー・フラッピング・貧乏ゆすり

ファンタジーは自分の世界に入ることというが、脳を癒す防衛反応とも考えられる。授業中先生の話聞くどころではなく、ボーッと自分の世界に入っている。このような子どもを見つけた時、先生は「ちゃんと聞きなさい」「何ボーッとしているのですか」などと注意することが多いが、効果的ではない。ますます不安になったり、緊張したりで改善されることはない。次の指示を与える程度にするか、黙認するかが効果的である。フラッピングは自閉傾向のある人が、さらに不安に陥った際、よく手をひらひらさせたり、手を組んだり、文字を書いたりする行為のことだが、不安を強く感じやすい子どもには、このフラッピングが出ることもある。ファンタジーと一緒に出ることも多い。体を横に揺らすローリング(ロッキング)も同じ現象からおきるとされる。

子どもを叱っている際、フラッピングやローリングが出たら、心を追いつめていることになるので、それ以上は叱るのをやめ、「そういうときがあったなー」「まあ、考えておきなさい」などと、緊張を弛緩させる。貧乏ゆすりも不安や緊張の現れであることが多く、手に出るフラッピングが脚に出たと解釈してもよいと思う。

平山諭 『8歳で脳は決まる！ 子どもを救う父親の力』（河出書房新社）

年賀状コンクールやペーパーチャレンジで アスペルガーの子のやる気を引き出す

1 アスペルガーの子も年賀状づくりに取り組む

子ども達と年賀状コンクールに応募する。
この時間までに以下の指導をしておく。

- ① 「うっしまるくん」での書き方練習
- ② 私製はがきでの練習

黒板に見本をはっておき、応募はがきを渡す。
アスペルガーのA君以外の他の5人は、すぐに取り組み始める。
A君を見る。
はがきを前に取りに来たが、席に帰って、机につっぷしている。

ファンタジーに入っていると推定する。

ここは、意図的に無視し、他の子の支援をおこなっていく。
しばらくすると、**A君もファンタジーから戻り**、鉛筆を持っている。
「何、書いたら、いいん？」と聞いてくる。

前の見本を示し、「こんなの」と、短く返す。

A君もはがきに書き始める。

「あけましておめでとう」と見本と同じように書いた後、**下に絵を描いている。**

見本とも違う絵である。コンサートで、マイクを持って歌っているような絵であった。

しばらく後、「できました」と持ってきた。

「すごーい」と心の底から思ったが、A君に、過剰なほめ言葉をかけると、他の子にちょっかいを出したり物にあたったりすることが頭によぎる。

「よっし」と微笑んでうなずき、年賀状を受け取った。

時間が終わり、共にA君を担当している先生に、この年賀状を見せる。
「こんな絵、初めて見ましたね。歌ってる絵かなあ」と、笑顔で話された。
優れた教材によって、アスペルガーの子の力を引き出すことができた。

2 ペーパーチャレランに大熱中

冬休みまでの最後の数学の時間。前からやりたいと思っていた、ペーパーチャレランをおこなった。

最もルールも簡単な、「ゲーチョコキパーチャレラン」を両面印刷し、右側にはルールを載せておく。

説明し、すぐに始めさせる。アスペルガーのA君を見る。

いつもは、プリントを配られたら、ファンタジーに入ることが多い。

今回は入らずに、紙の方を見ている。

ここでは視線の中に入れておくだけにし、他の子への支援に回る。

一緒にやると、ルールも理解できていく。

得点が出る。

1位、2位、3位の欄にはらせる。

3位から落ちた子のところには、定跡通り、「どうぞ」と言って持って行かせる。

全体が安定したところで、もう1度、A君の様子をうかがう。

一生懸命、取り組んでいる。

時折、立ち歩くが、しばらくすると、机の方に戻っている。

終了、5分前。A君が持ってきた。

2位にあたる成績である。

「おっすごいね」とささやかにほめる。

こうした場面で過剰に**ほめすぎて、不安定**になった経験があるからである。

あくまで、低刺激が大切だ。

終了間際に、1位が入れ替わる。

2位に落ちた女の子は、「くやしい。また家に持って帰ってやる」と笑顔で言っている。

A君も3位の成績で終わる。

全員でのあいさつのあと、教卓のところに来る。

何事かと思う。

「ありがとうございました」と、終わりのあいさつを、わざわざ言いに来たのだった。

こんなことは、初めてである。

アスペルガーの子にも、ペーパーチャレランは確かに有効であると実感した。

負けたくない、やりぬく、支配しようとする、などの特性がプラスにあらわれていると思う。

特別支援学校でも実践し、子ども達の力を伸ばしていきたい。

大恵信昭『特別支援を要する子のコミュニケーションスキルを高める指導法』(明治図書)

目先を変える

1 変身するB君

今年度、2年生の担任となった。

国語の教科書を追い読みしていると立ち上がるB君の姿が視界に入った。

「シュー、シュシュシュー！」

教室中に響く声を出しながら天井に突き刺さるように手を挙げている。B君の変身が始まった。今日は仮面ライダーである。

たまに変身するならまだしも、毎日、毎時間のようにB君は変身した。

ウルトラマン、仮面ライダーになりきっているB君に、周りの様子は全く目に入っていない様子である。

周りの子も気になってしょうがない。

ある日、「B君、静かにして」と注意した子がいた。さっと変身をやめたB君は「誰が言った！」と言って殴りかかっていた。

目はつり上がり、「ハーハー」と息を吐いている。B君にどんな言葉も届かなかった。

このままでは、B君もクラスの子もかわいそうである。

まずはB君の変身をやめさせることが必要に思われた。

しかし、「やめなさい」と注意してもいっこうに止める気配はない。厳しく注意すれば、「うー」とうなり声を上げながら、今にも切れそうになる。

注意することでは、B君をよい方向に向けることはできなかった。

2 変身の原因

B君が変身する場面を注意して見ていると2通りの原因があることに気がついた。

1つ目は、「不安になったとき」である。

「どうやっていいのかわからないとき」「わたしがかまってあげていないとき」に決まって変身し始めた。

変身するものは、仮面ライダーやウルトラマンといったヒーローものだった。

もう1つは、「うれしいとき」である。

問題が解けたときなど、決まって「かにさん」に変身した。にこにこしながら教室中を走り回った。

「かにさん」になるときは、他の人に迷惑をかけることはなかった。周りの子もほほえましく見守っていた。

問題なのは、「不安になったとき」に変身するときだった。

3 目先を変える

不安が原因で変身している時には、すっかりヒーローものになりきっていた。普通に話しかけても全く耳を貸そうとしない。ではどうすればいいのか。

「目先を変える」ことである。

そのために、あの手この手で目先を変えようとした。山ほどの失敗の中から効果があったものをいくつか紹介する。

① 一緒に変身する

「B君、おもしろいことやってるね。一緒に変身したい人？」と一緒に変身してくれる人を募った。

学級開き間もない頃で恥ずかしいのか、誰も手を挙げない。そこで、私が一緒に仮面ライダーに変身した。

必死になって変身しているB君の横で、B君よりも派手に変身する。

さすがのB君も私のことが気になって仕方がないようである。

「B君、これでいいのか？」と尋ねると、「えっ」と我に返るのが分かった。

②あと何分変身してるの？

変身しているB君に向かって、「おもしろいことやってるね、それ何？」と尋ねた。

「○△□※？」とヒーローものの名前が返ってきたがよく聞き取れない。

「ところで、あと何分変身してるの？」と聞き返した。

はっと我に返るB君。指を折りながら1, 2, 3……と考え始めた。

③ 変身スイッチ

変身を始めたB君にリモコンを持っているふりをしながら近づいていく。

「おっ、ウルトラマンか。じゃあ今度は飛行機」

そういいながら、ボタンを押す格好をする。

B君は、それに併せて飛行機になって教室を走り始める。

「次はかにさん……」つぎつぎに変身させていく。

そして最後に「今度は、勉強君」と言うと、席について、勉強を始める格好をするのだった。あとは、そのまま授業を続けた。

目先を変えさせるには、まずB君の

変身を受け入れること

が大切であった。

いったん受け止めたら、B君が「はっ」とするようなことを言ってやる。

ちがう思考回路を作ることでB君を我に返すことができた。

こうして初めて変身を止めさせることができたのだった。

藤原能成「マガジンMAK No.22」(TOSS岡山サークルMAK)

事例 12

ルールに厳密にこだわるとき

高機能自閉症の子どもの中には、ルールに厳密にこだわる子がいます。ささいなルール違反を見逃すことができず、友だちを繰り返し指摘し、トラブルになることもあります。彼らにどのように対応すればよいのでしょうか。

場面



掃除時間にトラブルが起きました。場所は教室です。

雑巾がけをしていると、DさんがA君を少し抜かしたのです。A君は、それを大目に見ることができずに「だめだよ！Dさん」と指摘します。Dさんは、少しだからと気にせず掃除を続けていると、A君は何回も何回も注意を繰り返し始めました。

あまりにもA君がしつこく言い続けるので、Dさんも頭にきてしまい喧嘩になってしまいました。

対応を考える

ルールに厳密にこだわるA君には、どのように対応すればよいのでしょうか。下に書きましょう。

■解説

【対応】 受容することが大切

A君は、ルールに厳密にこだわる。それに執着する。だから、周りから見ても、「少しくらい……」とか「ちょっとだから……目をつぶってあげて」と思っても、許すことよりも、「抜かすことはルール違反」ということが頭のなかを支配している状態なのだ。だから、いくら、ちょっとであっても駄目なものは駄目なのである。

このようなときは、「受容する」事が大切である。「A君の言う通り、抜かすことはいけないよね。Dさんも分かったようだからね。注意はこれで終わろうね。A君ありがとう」と声をかけ、その場を終えた。

桑原和彦「特別支援教育教え方教室」19号（明治図書）

教室での エピソード

その後のA君 ～向山型体育でイライラした気持ちを忘れさせる～

一応の収まりは見せたが、それでもA君は、ぶつぶつと文句を言っていた。そして少し憤慨した表情で体育館へやってきた。

体育館に子ども達が集まる。私は、いつもどおりの授業を始める。リズム太鼓を叩いて、「走ります」「スキップ」「ギャロップ」「うしろ走り」などテンポよく指示を出した。A君は、体育館の端っこを、行ったり来たりと素直に指示どおり動いていなかった。しかし、私は詰めなかった。「A君やりなさい！」などと詰めることで、A君の気持ちを余計に閉じ込めてしまうからだ。A君自身は、先生の指示どおりに動いていないことを頭では理解している、しかし、気持ちが伴わずにスキップなどできない。できないと分かっていることを指摘されたら、余計に頭にきてしまうのだ。だから、することは1つ。温かな視線を送り「先生は分かっているよ」と容認するのである。A君は、掃除の時間のDさんのことでイライラしながら「自分が先生の指示どおりやっていないことで怒っているんじゃないか」と気にかけているのだ。だから、それは分かっているよと、認めてあげることが教師には必要なのである。完全に教師の指示を無視しているわけではない。一応、フラフラではあるが動こうとしているのだ。完全に無視しているわけではないことは、A君に目線を合わせることで分かる。A君もチラチラと私を見てくるのだ。このような状態（A君と教師に細い糸が繋がっている状態）を感じられれば教師は待つことができる。

次のパーツに入る。「壁にタッチして戻ってきなさい」「ジャンプして高い所に触って戻ってきなさい」と次々に指示を出す。A君がやろうかなと体が動き出し始めた。この時がチャンスである。教師が、ほかの子に気づかれないように、さりげなくA君の近くに移動する。この指示を出した後、子ども達が戻ってくる場所をランダムに教師は動くことによって、子ども達は「先生どこ？」となる。その場面を利用して、A君の近くに移動するのだ。A君は始めと同様に、壁際にいる。だから、すぐタッチができる。あとは、教師のところまで走ればよいのだが、それをしない。だから、私が近づくの。近づいて私は、「A君？」とだけ声をかけて、両手を差し出した。その瞬間、A君はゆっくりとではあるが、軽く私の手をタッチしたのだ。私は「A君1番！」とみんなに聞こえるように言った。A君は、はしゃいで喜ぶことはせず、少し表情が和らいだ。しかし心の中は喜んでい様子であった。

続けて、次の指示を出す。「壁を両手で3回押してきなさい」私は、A君から少し離れた位置に立った。するとA君が、近くの壁に行き運動を始めたのだ。そして3番目に戻ってきた。指示で組み立てる向山型体育は、実にシンプルだ。余計なことを考える間もない。だからこそ熱中できるのだ。A君もイライラした気持ちを忘れたのだと思う。

桑原和彦「特別支援教育教え方教室」22号（明治図書）

事例 14

負けるとパニックになるとき

アスペルガー症候群の子ども達は勝ち負けにこだわる傾向にあります。ゲームなどをしていて、負けそうになるといらいらしたり、暴れ出したりします。負けるとパニックになる子の対応を考えましょう。

場面



小学校1年生のC君です。休み時間にキックベースなどのゲームで、自分が失敗したり、負けたりしてしまうと、イライラします。授業が始まっても勉強しようとしません。また、他の子に注意されると、「うるさい!!」といって机をたたいたり、蹴ったりすることもあります。

原因と対応を考える

パニックになる原因はなんでしょうか。またパニックを起こさないようにするには、どのように対応すればよいのでしょうか。下に書きましょう。

原因

対応

■ 解説

【原因】 勝たなければ気がすまないため

アスペルガー症候群の子には次のような特徴がある。

- ・勝ちたい
- ・支配したい
- ・トップに立ちたい

ゲームには勝ち負けがつきものだ。
そのため、

勝たなければ気がすまない

となってしまうのである。

この傾向は学校を出たらいきてくる。
社会でトップにいる人は「勝たなければ気がすまない」という傾向がある。
この傾向は必ずしも、つぶさない方がいいのである。
叱って何とかさせようとするのではなく、

見つめたり、ほほ笑んだりといった、癒し系の対応を心がけていくこと

が大切である。

【対応】 ゲームをする前に布石をうつ

毎回ゲームのたびにパニックになっていては、周りの子も楽しくなくなってくる。
「負けてもがまんすること」ができるように、

ゲームを始める前に布石を打っておく。

たとえば、次のように言うようにする。

勝ちもあれば、負けもあります。
勝ち負けがいやなら、最初から先生は一緒にやりません。

このように言ってからゲームを行うようにすることで、少しずつがまんできるようになってくる。

参考文献：『特別支援Q&Aベストセレクション』（NPO法人 岡山教師力向上支援サークル）

何でも1番になりたい・負けるのがいやだというD君を変えた、五色百人一首の100回の経験

1 何でも1番になりたい

アスペルガーのD君は何でも1番にならないと目がつり上がった。挙手した時に1番に指名しないと机をドンとたたく。ノートを見せに来る時も1番になろうと大きな体を揺すって突進してくる。小柄な子どもは吹っ飛ばされた。百点でないテストはゴミ箱に捨てる。

そして「誰かがぼくのテストを捨てました」と後で大騒ぎした。何でも1番になりたいD君は些細なことでキレて友だちに暴力をしてしまう。落ち着いてから話を聞くと大きな体を小さく丸めてさめざめと泣いた。

D君がいるクラスを3年生で担任した。前年、D君が原因となるトラブルが絶えず、学級崩壊していた。

クラスを立て直すため、百人一首を始めた。

2 負けるのがいやだ。もうやらない

出会いの翌日からさっそく始めた。毎日1試合5分間程度だ。初回勝ったD君は満面の笑顔。音楽が好きなD君は百人一首のリズムに興味を持った。ルールもすぐに理解した。体育のサッカーなどと違って対戦相手はひとり、はっきりしている。5回目まで運良く勝つことが多く、負けても舌打ちして我慢した。

しかし、札を覚えてくる子が増え、負けが続いた8回目「A子なんかに負けたんか」という周りの声にキレた。

巨体を揺らして突進し、叫び声で威嚇した。4月半ば、10回目の対戦でも負けた。目がつり上がり、札を全部振り払った。机をけっ飛ばして教室を飛び出す。

「負けるのがいやだ。もうやらない」

クールダウンの部屋で泣き叫びパニック状態になる。

3 もう一度、やってみようかな

D君の状態を考え、4月末まで百人一首を休む。5月に家庭訪問でD君の母親と面談した。ルールや負けを受け入れられず、帰宅後も友だちとトラブルが多いことを聞く。トランプでもカードゲームでも、負けそうになると怒ってケンカになる。体育の授業ではトラブルから興奮することが多く、そのため昨年からずっと見学していた。

母親との話し合いの結果、百人一首を再開することにした。
D君がルールを受け入れ、負けへの耐性をつけるためである。

5月連休明け、「見ているだけでいいよ」とD君に伝え、周りにも話して再び始める。6月半ば(11～34回目)までは読み札を読む私の側で試合を見学した。参加しないから負ける心配はない。ある日、読み札を貸して欲しいという。D君は休み時間に札を覚える練習をしていた。35～47回目の試合は句を口ずさみながら立って試合を見るようになった。

7月に入った頃、「もう一度やってみようかな」とD君が見学中につぶやいた。

翌日、自分で決めて54回目の試合に参加をしたが負け。泣いて一日中突っ伏すが、暴れることはなかった。
まもなく夏休みに入った。母親と相談して夏休みに百人一首を覚えることにした。
下敷き・札などのグッズを渡し励ました。

夏休みの間ほとんど毎日、家の誰かがD君の練習相手をしてくれた。

熱心な家族の協力で休み中に30回の練習をしてきた。D君が百人一首の試合を経験して94回目になっていた。

4 勝つも負けるも時の運 99回目の事実

夏休み明け、D君が夏休みに覚えた青札で開始した。96回目、参加。勝つ。その後も三連勝で「すごいじゃん」と周りに言われガッツポーズ。99回目、わずかな差で負ける。D君は机を拳で1発たたく。顔がこわばっている。クラスに一瞬緊張が走る。

私がすかさず「勝つも負けるも……」と言うとD君が表情を緩めて「時の運」と続けた。

D君が自分の負けにこの言葉を言うのは初めてだった。この後、3月まで、小さな苛立ちがあったもののD君は試合に参加しキレることはなかった。そして体育の授業にも参加するようになっていった。

高野宏子「教育トークライン」 2009年3月号 (東京教育技術研究所)

腕相撲で負けたASの子への対応 パニックになった原因をときほぐす

1 腕相撲で負けてパニックになる

3年生のクラス解散パーティーで、ある会社が腕相撲大会を主催した。まず、班の中で勝負して代表を決め、代表者で決勝トーナメントを行うというルールだった。ASのA君は、大はりきりだった。「よ～し、絶対勝ってやる」と、かけ声も勇ましい。すかさず、会社の子どもたちから、「負けて怒った人の班は失格になります」と一言。小野の言葉を真似しているのだ。その言葉に、「わかりました」と子ども達がにこやかに答える。そして、いよいよ腕相撲大会がスタートした。A君の班でも熱戦が繰り広げられていた。そして、A君ともう1人の男の子で代表決定戦が行われることになった。力は、どちらも互角。試合が始まって、ずっと膠着状態が続く。他の班が終わっても、まだA君の試合は終わらない。みんなの注目が集まる中、相手の男の子がだんだんと優勢になっていった。しかし、負けそうになっても、ぎりぎりのところでA君は踏ん張り続ける。その状態がしばらく続いたが、誰の目にもA君の負けは決定的だった。時間がかかりかかっていたこともあり、会社の子が、相手の子の勝ちを宣言した。ガッツポーズをして喜ぶ相手の子。熱戦に拍手を送る周りの子。そんな中、A君は地団駄を踏んで泣き出した。そして、その場にうずくまって動かなくなった。そのままでは、それ以降の試合が続けられないので、「A君、こっちにいらっしやい」と小野が声をかけた。しかし、A君は動こうとはしない。3学期の終わりである。このように地団駄を踏むことも、小野の呼びかけに反応しないこともありえない。だから、よほどのことなのだろう。

2 パニックの原因は？「おれ、負けとらん」

泣きながら、A君はずっと「おれ、負けとらん」とつぶやいていた。この言葉から、原因ははっきりとわかる。

自分は負けていないと思っている。→会社の子に負けと言われた。

これが納得できないのである。決して、「負け」を受け入れられないのではない。では、なぜ自分は負けていないと思っているのか？それも、試合の記述からわかるはずだ。

しかし、負けそうになりながらも、ぎりぎりのところでA君は踏ん張り続ける。(中略) 時間がかかりかかっていたこともあり、会社の子が、相手の子の勝ちを宣言した。

ここでの大切な事実は、「A君は自分の手をつけていない」ということである。
「手をつけていない＝負けではない」と信じているA君の中では、まだ勝負の途中だったのである。これでは、A君が納得できるわけがない。

3 A君のこだわりを解きほぐす

客観的に見ると、A君の行動はわがままに映るだろう。だからこのような時、多くの場合、A君は叱責される。

そうすると、A君はさらに情緒的なこじれを起こしていく。あるいは無視されて、放って置かれる。これも同じことである。

このような場こそ、教育のチャンスなのである。

一つ一つ考えてみると、A君が「負けていない」と思っているのは、悪いことではない。一方、会社の子の判断も悪いことではない。

この食い違いを解きほぐすことが、教師の大切な仕事なのである。

私は、まず彼の気持ちを受け入れた。

「A君は負けてなかったんだよなあ。まだ、勝負の途中だったんだよなあ。それなのに負けと言われたから腹がたったんだよなあ」そう言うと、嗚咽しながらA君は何度もうなずいた。

「会社の人は、いじわるでやったんじゃないんだよ。ずっと勝負が終わらなかつたら、お楽しみ会が終わらないでしょう。だから、時間がかかる時は、途中でもどっちかを勝ちにするように決まってるんだ。本当の大会でも、全部そうなんだよ。

さらに、こう続けた。

「でも、A君はそれを知らなかったんだよなあ」そう言うと、「知らなかった」と即座に答えた。

ここで、やさしく次のように問いかけた。

「そうか。じゃあ、それを始まる前に言ってくれてたら、怒らなかったんだよなあ？」

A君は「うん」と答えた。あの地団駄を踏んでいた時のこわばりは、もうなくなっていた。

「A君は、自分のことがよくわかって偉いなあ」

そう言ってA君を膝の上にのせた。

「会社の人も言わなくちゃいけないことがたくさんあって、忘れちゃったんだよなあ。だから、先生が言えばよかったなあ。ごめんな。それにしても、A君は強いなあ。びっくりした」

そう言うと、A君はニコニコしながら笑っていた。そして、しばらく小野の膝の上で過ごした後、大好きなフルーツバスケットが始まると、みんなの輪の中に自然と戻っていった。

その後は、何事もなかったかのようにA君も周りの友だちも一緒にパーティーを楽しんだ。

小野隆行「ジュニア・ボランティア教育&総合的な学習」93号（東京教育技術研究所）